『藤簍冊子』源氏物語和歌注釈稿（下）

山本綏子

【本文】

若菜　上

641　猶わかきけこそそひぬれ春ののにつむ菜を君が老のはじめに

【注】

○　猶わかきけこそそひぬれ……玉鬘と久しぶりに対面した源氏は、「いとわかくきよらにて、かく御賀（＝四十の賀）などいふことは、ひがかぞへにやとおぼゆるさまの、なまめかしく、人のおやげなくおはします」〈若菜　上〉と、とても四十歳を迎えたとは思えない様子であった。その姿を目にして、玉鬘は、「めづらしくとし月へだててみ奉り給ふは、いとはづかしけれ」〈若菜　上〉と思わずにはいられない。源氏自身も、「すぐるよはひも、みづからの心にはことにおもひとがめられず、ただ昔ながらのわかわかしき有様にて、あらたむることもなきを、」〈若菜　上〉と、依然として気持ちは若々しいままであると語る。

○　春ののにつむ菜……「『万葉集』巻頭歌に（中略）早春の菜摘み歌がある。この若菜摘みが平安時代には新春のめでたい行事として、若菜を食する「子の日の遊び」となり、それに拠って『古今集』には「春日野の飛火の野守いでて見よ今いくかありて若菜摘みてむ」（春上・一八・よみ人しらず）のような、若菜を摘む歌が多く見られる。」〈歌ことば〉。

○　春ののにつむ菜を君が老のはじめに……「玉鬘が源氏四十の正月の賀として、若菜を贈ったことをいう。「（源氏）小松原末のよはひに引かれてや野べの若菜も年をつむべき」（若菜・上）。」〈新大系〉。「正月廿三日子の日なるに、左ノ大将殿の北の方（＝玉鬘）、わかなまゐり給ふ。」〈若菜　上〉。

○　君が老のはじめに……玉鬘に対して源氏は、「かかるすゑずゑ（＝玉鬘が連れてきた子供。源氏の孫にあたる）のもよほしになん、なまはしたなきまで（自分の老いを）思ひしらるるをりも侍りける。（中略）（玉鬘が）人よりことに（源氏の年齢を）かぞへとり給ひける、けふの子ノ日こそなほうれたけれ。しばしは老をわすれても侍るべきを」〈若菜　上〉と語る。玉鬘が源氏に若菜を献上したこの日は、源氏にとって、自身の容貌や心持ちとは裏腹

に老齢期に入ったということを自覚せずにはいられない日でもあった。

【現代語訳】

（源氏には）まだ若々しい雰囲気が確かに添ってはいるものの、（実際には玉鬘が）春の野で摘む若菜を（源氏の）君の老いのはじめに（祝いとして）贈る（ような年齢になってしまった）ことだ。

〔鎌田茜〕

【本文】

下

642　みちのくにいつか来にけんたならしの琴は緒だえの橋と成にき

【注】

○　みちのく……「『万葉集』に見える、「陸奥の真野の草原遠けども面影にして見ゆといふものを」（巻三・三九六・三九九・笠女郎）や大伴家持の陸奥での金産出を慶賀する（中略）長歌（巻一八・四〇九四・四一一八）などは、遠い未知の国への強い関心が窺えよう。」〈歌ことば〉。

○　たならしの琴は緒だえの……「紫の上が六条院の合奏で弾く和琴をいう。」〈新大系〉。六条院の女性たちによる女楽において、和琴を奏でる紫の上の演奏はみごとで、「おとど御心おちゐて、いと有がたく思ひきこえ給ふ。」〈若菜　下〉。紫の上は少女時代に、源氏から箏の琴を教わっている。

（紫の上は）ちひさき御程にさしやりて、ゆし給ふ御てつき、いとうつくしければ、（源氏は）らうたしとおぼして、笛吹きならしつつをしへ給ふ。いとさとくて、かたきてうしどもを、ただ一わたりにならひとりたまふ。〈紅葉賀〉

なお、この女楽以前から、源氏は毎夜女三の宮に琴（きん）の琴を教えるようになり、必然的に紫の上訪問も間遠になる（「たい（＝紫の上）にも、そのころは御いとま聞え給ひて、あけくれをしへきこえ給ふ。」〈若菜　下〉）。

○　琴は緒だえの……琴の緒が絶えることは、「親友、知己に死別することのたとえ。」〈日国〉。秋成も、小沢蘆庵の死に際して、「玉琴の緒はたちしかば君が庵のふた木の松よただ秋の声」〈藤簍冊子・五五七〉と詠んでいる。「若菜　下」巻には、源氏が女三の宮のもとに留まっている間に、体調を崩していた紫の上が急死したとの知らせが入る場面がある（「おとどのきみ（＝源氏）は、まれまれ（女三の宮のもとに）わたり給ひて、えふともたちかへりたまはず、しづ心なくおぼさるるに、（紫の上が）たえいり給ひぬとて、人参りたれば」〈若菜　下〉）。その後紫の上はかろうじて蘇生するが、体調を崩しがちになる。この出来事をも踏まえているか。

○　緒だえの橋……「『源氏物語』藤袴の巻に「…をだえの橋にふみまどひける」（四〇一）という柏木の詠歌が載るが、陸奥国の歌枕という意識は顕れていない。（中略）恋人との仲が絶えることを象徴し、絶望的な恋の行末を思うのが一般的である」〈歌ことば〉。

女三の宮の降嫁以降、紫の上は不安定な立場に苦悩し、我が身を憂うことがしばしばとなる。

たい（＝紫の上）にはかく（女三の宮のもとに挨拶に）いでたちなどしたまふものから、われよりかみの人やはあるべき、身の程のものはかなきさまを、みえおき奉りたるばかりこそあらめなど、思ひつづけられて、うちながめ給ふ。手ならひなどするにも、おのづからふることも、物おもはしきすぢのみかかるるを、さらばわがみにはおもふことありけりと、みづからぞおぼししらるる。〈若菜　上〉

（紫の上）身にちかく秋やきぬらんみるままに青葉の山もうつろひにけり

（中略）ことにふれて、（紫の上の）心ぐるしき御気色の、したにはおのづからもりつつみゆるを、ことなくけち給へるも、（源氏は）有がたく哀におぼさる。〈若菜　上〉

たいのうへ（＝紫の上）、かく年月にそへて、かたがたにまさり給ふ御おぼえに、わが身はただひとところ（＝源氏）の御もてなしに、人にはおとらねど、あまりとしつもりなば、その御心ばへもつひにおとろへなん、さらんよをみはてぬさきに、心とそむきにしがなと、たゆみなくおぼしわたれど、（源氏が）さかしきやうにやおぼさんとつつまれて、はかばかしくもえ聞え給はず。（中略）（源氏が女三の宮のもとに）わたり給ふことやうやうひとしきやうになりゆく。（紫の上は）さるべきこと、ことわりとはおもひながら、さればよとのみやすからずおぼされけれど、〈若菜　下〉

たいには、れいのおはしまさぬ夜は、よひゐしたまひて、人人に物語などよませて聞き給ふ。かく世のたとひにいひあつめたる昔語どもにも、あだなるをとこ、いろごのみ、ふた心あるひとにかかづらひたる女、かやうなることをいひあつめたるにも、つひによるかたありてこそあゞめれ、あやしくうきてもすぐしつる有様かな、げにのたまひつるやうに、人よりことなるすくせもありける身ながら、人の忍びがたくあかぬことにする物おもひはなれぬ身にてややみなんとすらん、あぢきなくもあるかななど、思ひつづけて、よふけておほとのごもりぬる〈若菜　下〉

【現代語訳】

（遠い）陸奥（にやって来るように、紫の上の心は、かつて源氏と睦まじかった頃とは隔たったところ）にいつの間に来てしまったのだろう。使い慣らした琴の緒は絶え、（いわば）緒絶えの橋にな（るように、長年のつながりは途絶え、紫の上と源氏との間は隔た）ってしまった。

〔村屋〕

【本文】

柏木

643　そむきても世に在ふべき心にはまけてはかなき人のかなしさ

【注】

○　そむきても……「そむく」は、「道理・常識などに合致しない。さからう。反対する。」〈日国〉の意。ここでは、柏木と女三の宮との密通のことをいう。

○　世に在ふべき心にはまけて……病床で柏木が、この世に心残りがありながらも生きる意欲を失い、死に心を傾けている様子をいう。おとど北の方（＝柏木の父と母）、おぼしなげくさまをみたてまつるに、しひてかけはなれなん命かひなく、つみおもかるべきことを思ふこころは心として、又あながちに、この世にはなれがたく、をしみとどめまほしき身かは、（中略）たれも千年の松ならぬ世は、つひにとまるべきにもあらぬを、かく人（＝女三の宮）にもすこしうちしのばれぬべき程にて、なげの哀をもかけ給ふ人あらんをこそは、ひとつ思にもえぬるしるしにはせめ、〈柏木〉

をしげなき身を、さまざまにひきとどめらるる、いのり願などのちからにや、さすがにかかづらふもなかなかくるしう侍れば、こころもてなんいそぎたつ心ちのし侍る。さるは、この世のわかれさりがたきことは、いとおほうなん。〈柏木〉

なお、柏木の性格については、心弱いところがあると、夕霧によって語られている（「すこしよわき所つきて、なよびすぎたりしけぞかし、」〈柏木〉）。

○　はかなき……「柏木」巻において、柏木の人生ははかないものとして描かれる。

この世は（＝私の人生は）かうはかなくてすぎぬるを、〈柏木〉

いでや、このけぶり（＝女三の宮からの「煙くらべに」とあった和歌）ばかりこそは、此世の思ひいでならめ。はかなくも有りけるかな〈柏木〉

（柏木は）あわのきえいるやうにてうせ給ひぬ。〈柏木〉

（源氏は）ただ一ところの御心のうちにのみぞ、哀はかなかりける人（＝柏木）の契かなとみ給ふに、〈柏木〉

【現代語訳】

（女三の宮との密通という事実を背負いながら）道理に背いてでも生きながらえようという気持ちにおいては負けて、亡くなった人（柏木）の哀れさよ。

〔松山〕

【本文】

横笛

644　取つたふよゝのかたみの笛の音ののこりてさむき秋にざりける

【注】

○　取つたふよゝのかたみの笛……柏木遺愛の笛。陽成院から故式部卿宮に伝わり、故式部卿宮が柏木に贈ったことが、源氏によって語られる。「横笛」巻において、落葉の宮の母である御息所か

ら、夕霧に贈られる。しかし、帰宅した夕霧の夢に柏木が現れ、笛を伝えたい人はほかにあったと告げる（柏木の言葉に、「（笛を伝えたいと）思ふかたことに侍りき」〈横笛〉とある）。その後、源氏が薫のために笛を預かる。また、源氏は薫を、柏木の形見と見ている。

六条ノ院には、まして哀とおぼし出ること、月日にそへておほかり。このわか君（＝薫）を、御こころひとつにはかたみとみなし給へど、人のおもひよらぬことなれば、いとかひなし。秋つかたになれば、この君ははひゐざりなど。〈柏木〉

○ 笛……「懐旧の念を催させるものと歌われることがある」〈歌ことば〉。

○ 笛の音……夕霧の夢枕に立った柏木の和歌「笛竹にふきよる風のごとならば末のよながきねにつたへなん」〈横笛〉において、「ね」には「根」（子孫）の意をひびかせており、薫を指している。

○ 音ののこりて……柏木の吹いた笛の音色が世に伝えられていくこと（夕霧の和歌「よこ笛のしらべはことにかはらぬをむなしく成りしねこそつきせね」〈横笛〉による）。また、柏木の子である薫が、この世に遺されていることをもいう。

○ さむき……「心身が冷えるように感じられる様子。実際に温度が低い場合と、精神状態によっていっそうそのように感じられる場合とがある。」〈歌ことば〉。一条宮邸で夕霧は御息所や落葉の宮とともに柏木を偲び、柏木の笛を吹く。また、源氏は柏木の罪を憎みつつも、薫の無邪気な姿を見て哀れの思いを抱く（「よろづもしらずがほに、いはけなき（薫の）御有様をみ給ふにも、さすがにいみじくあはれなれば、」〈横笛〉）。

【現代語訳】

代々伝わってきた（柏木の）形見である笛の音（と薫）が（この世に）残って、（そのためいっそう）寒く（哀れ深く）感じられる秋であることよ。

〔沖崎〕

【本文】

鈴虫

645 それにとてつげし心を笛竹のふしたがへりとなげきてぞよる

【注】

○ それにとてつげし心……「夕霧の夢の中に現れ、わが子に（笛を）渡すように頼んだ、柏木の遺志をさす。」〈新大系〉。

○ 笛竹……八月十五夜に源氏が女三の宮を訪れた際、訪ねてきた夕霧や蛍兵部卿宮らを交えて、「鈴虫の宴」と呼ばれる管弦の遊びが催される。

○ ふし……「「竹」「よ（節の間）」との縁語」〈歌ことば〉。「「節」と「父子」を掛けた。」〈新大系〉。

○ ふしたがへりとなげきて……「ふしたがへり」は、笛竹の節回しが異なっていることと、柏木と薫、源氏と冷泉院という二組の

父子関係が異なっていることをいう。

女三の宮のもとで琴の合奏をした源氏は、こうした遊びにおける喪失感を通して、柏木を偲ぶ。

故権大納言（＝柏木）、なにのをりをりにも、なきにつけていとどしのばるることおほく、おほやけわたくし、もののをりふしの匂うせたるここちこそすれ。花鳥の色にも音にもおもひわきまへ、いふかひあるかたの、いとうるさかりしものを〈鈴虫〉

その際源氏は、女三の宮も聞いているだろうと、密通のことを意識しつつも柏木の死を惜しんでいる。

みすのうちにも、（女三の宮が）みみとどめてやきき給ふらんと、かたつかたの御こころにはおぼしながら、かかる御遊のほどにはまづ恋しう、〈鈴虫〉

さらにその夜、冷泉院の招きがあり、源氏らは参上する。喜び迎える冷泉院の容貌は、源氏ときわめてよく似ていた（「ねびととのひ給へる御かたち、いよいよ（源氏と）こともものならず。」〈鈴虫〉）。冷泉院のもとでの詩歌の宴の後には、源氏の冷泉院に対する思い入れと、冷泉院の退位の意図とが語られ、実の父子としての両者の思いが描かれる。

なほこの冷泉院を思ひ聞え給ふ御心ざしは、すぐれてふかく哀にぞおぼえ給ふ。院も（在位中は）つねにいぶかしう思ひ聞え給ひしに、御対面のまれにいぶせうのみおぼされけるに、いそがされ給ひて、かくこころやすきさまにとおぼし成りにけるになん。〈鈴虫〉

○　よる……「ひと所に集まる。」〈日国〉。「鈴虫」巻には、「鈴虫の宴」と、冷泉院のもとでの詩歌の宴という二つの宴が描かれる。そこには、『源氏物語』に描かれる、源氏と藤壺、柏木と女三の宮という二つの密通の関係者が集っている。

【現代語訳】

「その人（薫）に（笛を伝えたい）」と告げた気持ち（を抱いていた柏木）を、（管弦の遊びでの）笛竹の節回しが（風流人であった柏木の生前とは）異なってしまった（と同時に、源氏・柏木・薫という三者の父子関係が異なってしまった）と嘆いて（偲び）集うことだ。（さらに、源氏と冷泉院との父子関係も、本来とは異なってしまっている。）

〔村屋〕

【本文】

夕霧

646　迷ひ入こゝろの奥も霧こめてしののみだれの小野の山ぶみ

【注】

○　入……「入山の意の「入る」と、深く思い詰めるという意味の「思ひ入る」とを掛けて詠むこともある。」〈歌ことば〉。落葉の宮への想いを募らせる夕霧は、宮へ意中を伝え、その心の内を知り

たいと考えていた（「思ふことをもまほに聞えしらせて、人の御けはひをみんとおぼしわたる」〈夕霧〉）。小野訪問は、夕霧にとって、その機会でもあった。

○　入・奥……「夕霧」巻において、落葉の宮のいる所は、「奥」と表現されており（「みやはおくのかたにいとしのびておはしませど、」〈夕霧〉）、夕霧はそこへ入ってゆく（「御せうそこきこえつたへにゐざりいる人のかげにつきていり給ひぬ。」〈夕霧〉）。

○　霧……「霧は、古くより鬱屈して晴れることのない心情と深くかかわっており、そのイメージは以後も長く継承される。」〈歌ことば〉。夕霧が落葉の宮に思いを訴える場面では、霧がたちこめている。

そらのけしきもあはれにきりわたりて、山のかげはをぐらき心ちするに、〈夕霧〉

思ふこともうちいでつべきをりかなと、（夕霧が）思ひゐ給へるに、きりのただ此軒のもとまでたちわたれば、〈夕霧〉

まだ夕暮のきりにとぢられて、うちはくらくなりにたるほどなり。〈夕霧〉

この場面で、夕霧と落葉の宮とは和歌を交わす（〈夕霧〉「山里の哀をそふる夕ぎりにたちいでん空もなきここちして」〈夕霧〉、〈落葉の宮〉「山がつのまがきをこめてたつ霧も心空なる人はとどめず」〈夕霧〉）。夕霧は、「いへぢは見えず、きりのまがきは、立とまるべうもあらず、やらはせ給ふ。」〈夕霧〉と恨み言を口にするが、宮の態度はあくまでもつれない。

○　霧こめて……「おぼつかな浜名のわたり霧こめて引馬のうまや朝立ちかぬる」〈藤篋冊子・三〇五〉。

○　しの……「万葉歌以来の「しの」に「しのぶ」の意をひびかせることがその後も主流である」〈『和歌植物表現辞典』（東京堂出版）〉。「夕霧」巻冒頭では、夕霧の忍ぶ恋の様子が語られる。

此一条の宮（＝落葉の宮）の御ありさまを、（夕霧は）なほあらまほしと心にとどめて、おほかたの人めには、むかしをわすれぬよういにみせつつ、いとねんごろにとぶらひきこえ給ふ。したの心には、かくてはやむまじくなん、月日にそへて思ひまさり給ひける。〈夕霧〉

○　しののみだれの小野の……（夕霧）「里とほみ小野のしのはらわけてきて我もしかこそこゐもをしまね」〈夕霧〉。

○　みだれ……落葉の宮への恋心にまつわる、夕霧の心の乱れをいう。小野からの帰路も、夕霧は一方的に落葉の宮に想いを告げてしまったことについて思い悩む。

とし頃人にたがへる心ばせ人になりて、さまざまになさけをみえ奉るなごりなくうちたゆめ、すきずきしきやうなるが、いとほしう、心はづかしげなれば、おろかならず思ひかへしつつ、かうあながちにしたがひ聞えても、後をこがましくやと、さまざまに心みだれつついで給ふ、みちのつゆけさもいと所せし。〈夕霧〉

○　小野の山ぶみ……「夕霧が故柏木の北の方、落葉の宮を小野の山荘に訪れたことをさす。」〈新大系〉。「山ぶみの家路のつとに折りてこし香ぞなつかしき白菊の花」〈藤簍冊子・七六八・唯心尼〉。

【現代語訳】

迷って入り込む（夕霧の）心の奥も霧が立ちこめてい（るように、物思いに鬱屈してい）て、（そのような状態で）篠を乱（すように、落葉の宮への忍ぶ恋心を乱）して進む小野の山歩きであるよ。

〔丹治〕

【本文】

御法

647　花やぎしつかさのきぬと見し色は野辺の煙の雲のむらさき

【注】

○　花やぎしつかさのきぬと見し色……二条院で行われた、紫の上発願による法華経千部の供養は、帝をはじめ多くの人々が志を寄せる盛大なものであった。この法会で紫の上は、七僧の法服をそれぞれの身分に応じて出す。

七僧の法服などしなじなたまはす。もののいろぬひめよりはじめて、きよらなることかぎりなし。大かたなにごとも、いといかめしきわざどもをせられたり。〈御法〉

また、法会も終盤にさしかかる頃、参会した人々がそれぞれの衣を舞人に与え、法会は最高潮に達する。

「りようわう」の舞ひて、きふになるほどのすゑつかたのがく、はなやかににぎはしく聞ゆるに、みな人のぬぎかけたるもののいろいろなども、物の折からにをかしうのみ見ゆ。みこたち上達部の中にも、物の上手ども、てのこさず遊び給ふ。〈御法〉

○　つかさ・色……「身におはぬつかさのいろの杜若きぬに摺りつけ思ひ出に着む」〈藤簍冊子・二〇八〉。「風もなく晴れたる春の空見ればつかさのいろは緑なりけり」〈藤簍冊子・七五二〉。

○　野辺の煙……紫の上の野辺送りは盛大な儀式であったが、それとは対照的に煙はあっけなくのぼってゆく。

はるばるとひろき野の、所もなくたちこみて、かぎりなくいかめしきさほふなれど、いとはかなき煙にて、ほどなくのぼり給ひぬるも、れいのことなれどあへなくいみじ。〈御法〉

○　煙……「火葬の煙はその死を悼む表現として早くに定着している。（中略）茶毘に付す煙から、人の死の表象としての意味ももっていた。」〈歌ことば〉。

【現代語訳】

〈紫の上発願の法会では、人々の）華やいだ官位の衣（の色）として見た色は、（あっという間に紫の上の）野辺送りの煙の雲の紫色になってしまったことよ。

〔小野寺〕

【本文】

幻

648　春さむみ淡たつ雲にかくろひて光はいづら峰のしら雪

【注】

○　春さむみ……春になったが、紫の上を失った六条院は、悲しみに満ちている。

春のひかりをみ給ふにつけても、いとどくれまどひたるやうにのみ、御こころひとつは、かなしさのあらたまるべくもあらぬに、とには例のやうに人々参り給ひなどすれど、御心ちなやましきさまにもてなし給ひて、みすのうちにのみおはします。（中略）御あそび（＝春の管弦の遊び）もなく、れいにかはりたることおほかり。女房なども、とし頃へにけるは、墨染の色こまやかにてきつつ、かなしさもあらためがたく、思ひさますべき世なくこひきこゆるに、〈幻〉

○　雲にかくろひて……「姿が見えなくなった恋人や友のことが歌われる」〈歌ことば〉。紫の上の死後、源氏が引きこもって人に会おうとしないことをいう。

うとき人にはさらに見え給はず。上達部なども、むつまじき、又御はらからの宮たちなど、常に参り給へれど、たいめんし給ふことをさをさなし。〈幻〉

○　光……源氏をさす。「匂宮」巻冒頭は、「ひかりかくれ給ひにし後、」〈匂宮〉と始まる。

○　峰のしら雪……六条院が、あたかも春がきていないかのような状態であることをいう。

（源氏は）すみのまのこうらんにおしかかりて、おまへの庭をも、みすのうちをも、みわたしてながめ給ふ。女房なども、かの御かたみのいろかへぬもあり。れいのいろあひなるも、あやなどははなやかにはあらず。（源氏の）みづからの御なほしも、いろはよのつねなれど、ことさらにやつして、むもんを奉れり。御しつらひなども、いとおろそかにことそぎて、さびしくものこころぼそげにしめやかなれば、〈幻〉

【現代語訳】

春（はまだ浅く）寒いので、幾重にも重なり立つ雲に（光が）隠れている（ように、紫の上を偲んで源氏は邸に引きこもっている）。光（源氏）はどこだろうか、峰の白雪（だけが寒々しく見えるように、春らしくない六条院の様子）であることよ。

〔横倉〕

【本文】

匂宮

649　昔にはぬしこそかはれ梅さくらにほひおくれぬ春は来にけり

【注】

○　昔にはぬしこそかはれ梅さくら……「幻の巻で、紫の上は庭の梅と桜の木を匂宮に託し、後々の世話を頼んだ。」〈新大系〉。

おとなに成り給ひなば、ここにすみ給ひて、このたいのまへなる、紅梅と桜とは、花のをりをりにこころとどめてもてあそび給へ。〈御法〉

幼い匂宮は、紫の上の遺言を守ろうと、二条院の梅と桜の世話をする。

（匂宮は）「はは（＝紫の上）ののたまひしかば」とて、たいのおまへの紅梅、とりわきてうしろ見ありき給へる〈幻〉

わか宮（＝匂宮）、「まろがさくらはさきにけり。いかでひさしくちらさじ。」〈幻〉

やがて成長した匂宮は、紫の上の遺言を守り、二条院に住む（「紫のうへの、御心よせことにはぐくみきこえ給ひしゆゑ、三の宮（＝匂宮）は二条ノ院におはします。」〈匂宮〉）。

また、源氏が世を去った後、源氏に変わる存在は誰かと世間で取り沙汰される中、匂宮と薫とが評判が高いことをいう。

ひかりかくれ給ひにし後、かのみかげに立つぎ給ふべき人、そこらの御すゑずゑにありがたかりけり。（中略）たうだいの三の宮（＝匂宮）、そのおなじおとどにておひ出で給ひし宮の若君（＝薫）と、この二所なん、とりどりにきよらなる御名とり給ひて、げにいとなべてならぬ御ありさまなゞめれど、〈匂宮〉

○　にほひおくれぬ……匂宮と薫とは、容貌だけでなく、香についても互いに引けを取らない。薫には生まれついて身に芳香が備わっており（「かのかうばしさぞ、此世の匂ならず、」〈匂宮〉）、匂宮はそれに対抗して香を身に焚きしめている。

兵部卿ノ宮（＝匂宮）なん、ことごとよりもいどましくおぼして、それはわざとよろづのすぐれたるうつしをしめ給ひ、朝夕のことわざにあはせいとなみ、〈匂宮〉

【現代語訳】

昔とでは確かに主は（紫の上から匂宮へと）変わ（り、世の評判の的も源氏から変わ）ったが、（二条院の）梅と桜とが負けず劣らず咲き誇る（ように、互いに香では負けず劣らずの匂宮と薫とが美しさにおいて世の評判となる）春（のような時代）が到来したことだ。〔大谷〕

【本文】

紅梅

650　折てやる花に心をそへつればこをばいく春見ませとぞ思ふ

【注】

○　折てやる……「按察大納言が、娘を匂宮にと思い、紅梅の枝に添えて歌を贈ったことをいう。」〈新大系〉。

○　心……中の君を匂宮に娶せたいと思う気持ち。按察大納言は、匂宮に紅梅を贈る際に、「心ありて風のにほはす園の梅にまつうぐひすのとはずやあるべき」〈紅梅〉という和歌を添えて、匂宮の気を引こうとする。

○　こをばいく春……「「紅梅」を物名として詠み込んだ。」〈新大系〉。「うぐひすのすづくる枝を折りつればこうばいかでかうまむとすらん」〈拾遺和歌集・三五四〉。「子をばいかでかうまんとすらんと、人のとがめたまへるばかりに、住なれ貌もにくましからずなん。」〈『藤簍冊子』・巻六・「こを梅」〉（引用は、新大系による）。

○　見ませ……「道ゆかばとひても見ませ笠ぬひの真菅刈るてふまのの古池」〈藤簍冊子・四五九〉。

【現代語訳】

「折って贈る花に（中の君を匂宮に娶せたいという私の）気持ちを添えたので、（我が）子（中の君）を幾春も（の長い間）お世話ください」と、（匂宮に対して）思うことだ。〈按察大納言の心境〉

〔長嶋〕

【本文】

竹河

651　みだれ碁の左まけたりと聞からにめでし桜はちりぬともよし

【注】

○　左まけたり……新大系「右まけたり」。庭の桜の木を賭け物として、玉鬘の娘である大君と中の君とが碁の勝負をした際、負けたのは左方の大君。このことを踏まえ、板本の字形を確認し、「右」を「左」に改めた。

○　めでし桜……大君と中の君とが愛している、庭の桜のこと。おまへの花の木どもの中にも、匂まさりてをかしきさくらををらせて、（大君と中の君とが）「ほかのにはにずこそ」などもてあそび給ふを、〈竹河〉

また、碁の勝負の時に桜襲の衣裳を着ていた大君のことも指す。

（大君は）桜のほそなが、山ぶきなどの、をりにあひたる色あひの、なつかしき程にかさなりたるすそまで、あいぎやうのこぼれ落ちたるやうにみゆる、御もてなしなども、らうらうじうこころはづかしきけさへそひ給へり。〈竹河〉

この大君に、蔵人の少将は一途に思いを寄せていた（「ゆるし給はずは、（大君を）ぬすみもとりつべく、むくつけきまで（蔵人少将は）思へり。」〈竹河〉）。

○　桜はちりぬ……碁を打つ大君を垣間見た蔵人少将は、大君の美しさを、散った花の形見として見ていたいくらいだと感じている。

つくづくとみれば、さくら色のあやめもそれとみわきつ。げに「ちりなんのちのかたみ」にもみまほしく、匂おほくみえ給ふを、いとどことざまになり給はんことわびしく思ひまさる。〈竹河〉

○　ちりぬともよし……桜が散るのを見た大君が、勝負に負けてもなお桜への愛着が変わらないことを歌に詠む場面を踏まえている。

風あららかに吹きたる夕つかた、（桜が）みだれおつるがいとくちをしうあたらしければ、まけがたの姫君、

さくらゆゑ風にこころのさわぐかな思ひぐまなき花とみ

るみる

また、大君が冷泉院に嫁いでも、蔵人少将は大君を諦めることができないでいることをも指す。

（蔵人少将）「いまはかぎりと思ひ侍る命の、さすがにかなしきを、（大君が）哀と思ふとばかりだに、ひとことのたまはせば、それにかけとどめられて、しばしもながらへやせん」〈竹河〉

此中将（＝蔵人少将）は、猶思ひそめてし心絶えず、うくもつらくも思ひつつ、左大臣の御むすめをえたれど、をさをさ心もとめず、〈竹河〉

【現代語訳】

みだれ碁（の勝負）は左（の大君）が負け（て桜が中の君のものになってしまったように、大君は冷泉院へ参院することが決まった）と聞いたけれど、愛した桜は散ってしまったとしても美しい（ように、大君は院に嫁いだとしても魅力的な）ことだ。〈蔵人少将の心境〉

〔松山〕

【本文】

橋姫

652　都にもいろをあらそふ秋ながら人香なつかし宇治の山里

【注】

○　いろをあらそふ秋ながら……「いろ」は、紅葉の色と、恋愛沙汰を指す。また、「秋」に「飽き」を掛ける。薫は、自分が恋愛沙汰とは距離を置く生活をしていることを大君に語る。

よのつねのすきずきしきすぢには、おぼしめしはなつべくや。さやうのかたは、わざとすすむる人侍るとも、なびくべうもあらぬこころづよさになん。〈橋姫〉

色事に限らず、薫には俗事を厭う傾向があり、そのことが薫の道心と関わっている。

薫は、出生の秘密によって仏道を志すようになったのであるが、真相を知らない世間の人にとっては、光源氏の御子で、世俗的に恵まれた薫の道心は奇特なものとして賛美された。薫は、このような他者の評価と真実の自己との齟齬を認識し、仏道へと心を傾けた。〈『源氏物語事典』・大和書房〉

○　秋……「秋の寂寥感は文学的感興の中でも至上のものとされ、（中略）物語の場面にしても、匂宮の春に対して薫の秋（中略）といった具合に、人物像の内面志向との相関が指摘される。」〈歌ことば〉。

○　人香なつかし……恋愛に関心のなかった薫であるが、大君の姿を垣間見た晩秋の夜以来、心境が変化し、大君に惹かれる。

昔物語などにかたりつたへて、わかき女房などのよむをもきくに、かならずかやうのことをいひたる、さしもあらざりけんと、にくくおしはからるるを、げに哀なるもののくまあるべき世なりけりと、こころうつりぬべし。〈橋姫〉

（薫は、大君の文を見て）まほにめやすくものし給ひけりと、

心とまりぬれど、〈橋姫〉

大君の姿が脳裏から離れない薫は、これ以降宇治との文通を始める。

（大君の様子は）おもひしよりはこよなくまさりて、おほどかにをかしかりつる御けはひども、おもかげにそひて、なほおもひはなれがたき世なりけりと、心よわく思ひしらる。御文奉り給ふ。〈橋姫〉

【現代語訳】

都においても（紅葉の）色づきを競い合う秋（が来て、それを煩わしく感じるように、恋愛沙汰）を厭っていたにもかかわらず、（大君を垣間見して以来）人の香が慕わしい宇治の山里であるよ。〈薫の心境〉

〔横倉〕

【本文】

椎が本

653　あはれ君世をうぢ山の奥深くほだしの綱はたちて入けん

【注】

○　世をうぢ山の……宇治は、「「歌枕」の文化も多いが、その作歌上の根幹にある興味は、やはり「憂し」と地名とを重ねる妙にある」〈歌ことば〉。また、「（世への）嘆きは遁世への志と結びつきもするのである。「山里」や「山のあなた」への憧れや、そこでの安らぎをうたったものがかなりの数にのぼる。」〈歌ことば〉。

○　ほだし……「「出家」「出離」にあたっての「ほだし」という用い方が、『源氏物語』をはじめ平安の文学に多かった。」〈歌枕〉。八の宮にとっては、将来を案ずるがゆえに仏道の妨げとなっていた、娘である二人の姫君を指す。

ただこの御ことども（＝姫君たちのこと）のいといとほしく、かぎりなき御心づよさなれど、必ず今はとみすて給はん御ころはみだれなんと、み奉る人もおしはかりきこゆるを、〈椎本〉

○　たちて入けん……参籠していた山寺でも、姫君たちを気にかけていた八の宮であったが、そのまま病で亡くなってしまう（「かぎりある道には、先だち給ふもしたひ給ふ御心も、かなはぬわざなりけり。」〈椎本〉）。

【現代語訳】

哀れな（八の宮の）君よ、世を憂えて宇治山の奥深くに、ほだしの綱（であった姫君たちへの思い）は（ついに）断ち切って入（っていって亡くな）ったのだろう。

〔大谷〕

【本文】

総角

654　情ある人もつらしな蓮葉の上に心をのせし身なれば

【注】

○　情ある人もつらしな……薫は熱心に大君に求婚するものの、薫の人柄がすばらしいことや、大君への思いやりが、却って大君にとっては苦悩のもとになっている。

此人（＝薫）の御けはひ有様の、うとましくはあるまじく、故宮も、さやうなるこころばへあらばと、をりをりのたまひおぼすめりしかど、みづからはなほかくてすぐしてん、（中略）この人の御さまの、なのめにうちまぎれたる程ならば、かくみなれぬる年頃のしるしに、うちゆるぶ心もありぬべきを、はづかしげにみえにくき気色も、なかなかいみじうつつましきに、わがよはかくて過しはててんと（大君は）思ひつづけて、〈総角〉

かうおろかならずみゆめる（薫の大君への）こころばへの（後になって）みおとりして、われも人もみえんが、心やすからずうかるべきこと、〈総角〉

○　蓮葉の上……「「蓮の上」は極楽浄土を指し、（中略）宗教上の清浄さの象徴とされた」〈歌ことば〉。

○　心をのせし……「白雲に心をのせてゆくらくら秋の海原思ひわたらん」〈藤簍冊子・二八二〉。

○　蓮葉の上に心をのせし……大君は生きる望を持たず（「げになながらへば、心のほかにかくあるまじきこともみるべきわざにこそはと、もののみかなしうて、」〈総角〉）、また自分の命が長くないことを感じている。

ぬきもあへずもろき涙の玉のをにながきちぎりをいかがむすばん〈総角〉

世の中にひさしくもとおぼえ侍らねば、〈総角〉

さらに、結婚による苦悩や罪障を背負うよりも死を望む心境にもなっている。

なほわれ（＝大君）だに、さるもの思（＝結婚による苦悩）にしづまず、つみなどいとふかからぬさきに、いかでなくなりなんとおぼししづむに、〈総角〉

なほかるついでに（＝病気になった機会に）いかでうせなん、〈総角〉

【現代語訳】

情深い人（薫）も（私にとっては）辛い（存在である）ことよ。（私は）極楽浄土に心を預け（、死を願う心境になっ）た身なので。〈大君の心境〉

〔長嶋〕

【本文】

早蕨

655　法の師の是をたき木にかへてつむ野のつくづくし山の早蕨

【注】

○　法の師……八の宮とゆかりが深かった、宇治の山寺の阿闍梨。

○　たき木……「「投げ木」に同じ。」〈新大系〉。投げ木は、「薪とし

て火に投げ入れる木。和歌で、多く「嘆き」の意にかけていう。〈日国〉。中の君の嘆きとは、父の死に加えて、慰め合っていた姉をまた亡くしたことによる。

（中の君は）よろづかきくらし、こころひとつをくだきて、宮（＝八の宮）のおはしまさずなりにしかなしさよりも、ややうちまさりて（大君のことが）恋しくわびしきに、いかにせんと、あけくるるもしらずまどはれ給へど、よにとまるべき程はかぎりあるわざなりければ、しなれぬもあさまし。〈早蕨〉

○　つむ……「重ねる。（中略）「嘆き（ここは投げ木を掛ける）を積む」という措辞が用いられることもある。」〈歌ことば〉。阿闍梨が中の君に蕨などを贈ったのは、八の宮生前からの習慣による（「君にとてあまたの春をつみしかばつねをわすれぬはつわらびなり」〈早蕨〉）もので、中の君の身の上を案じてのことである（「今はひと所（＝中の君）の御ことをなん、やすからずねんじきこえさする」〈早蕨〉）。阿闍梨の誠実な心遣いに、中の君は心打たれる（「こよなくめとまりて、なみだもこぼるれば、」〈早蕨〉）。

【現代語訳】

仏道の師（である山の阿闍梨）が（中の君を案じて）、これを（父と姉の死という重なる嘆きという）薪のかわりとして摘み取って（、今年も八の宮生前の習わしに）重ね（て贈）る。（そのようにして贈られた）野の土筆と山の早蕨（が、中の君の心にしみ入ること）であるよ。

〔沖崎〕

【本文】

寄生

656　見まさりにかく咲花を根分けしてぬすままほしき園の白菊

【注】

○　花・白菊……浮舟を指す。

○　見まさりにかく咲……中の君は薫に、大君に似ている異母妹、浮舟の存在を話す。

さいつごろきたりしこそ、あやしきまで、むかしの人（＝大君）の御けはひにかよひたりしかば、哀におぼえなり侍りしか。〈寄生〉

大君に瓜二つという点から薫は興味を持つ（「にたりとのたまふゆかりにみみとまりて、」〈寄生〉）。ただ、中の君は、「またありいはば、御心おとりもしぬべきことになん」〈寄生〉と、大君に似ていると期待し過ぎて落胆することもあるかもしれないと懸念し、薫もそのことを案じる（「ひと（＝浮舟）のほいにもあらずは、うるさくこそあるべけれ」〈寄生〉）。ところが、宇治で偶然垣間見した浮舟の姿は大君に酷似しており、薫は心打たれる。

まづかしらつきやうだいほそやかにあてなる程は、いとよう物思ひいでられぬべし。〈寄生〉

これをみるにつけて、ただそれと思ひ出でらるるに、例の涙

おちぬ。〈寄生〉
哀なりける人かな、かかりけるものを、いままでたづねもしらで過しける事よ、〈寄生〉
ただ今もはひよりて、「世の中におはしけるものを」といひなぐさめまほし。〈寄生〉
かほ鳥のこゑもききしにかよふやとしげみをわけてけふぞたづぬる〈寄生〉

○　根分けしてぬすままほしき……大君の面影を宿す存在として、浮舟を手に入れたいと考える薫の心境をいう。
これよりくちをしからんきはのしならんゆかりにてだに、（大君に）かばかりかよひきこえたらん人をみては、おろかにえおもふまじき心ちするに、ましてこれは、〈寄生〉
これは（大君とは）こと人なれど、なぐさめ所ありぬべきさまなりとおぼゆるは、此人（＝浮舟）にちぎりのおはしけるにやあらん。〈寄生〉
また、薫は、「かく契ふかくてなんまゐりきあひたると（浮舟に）つたへ給へかし」〈寄生〉と、弁の尼に仲立ちを頼む。

【現代語訳】
（話に聞いて）想像していた以上（に大君に瓜二つ）の姿で、このように咲く花を、根分け（するように、大君のゆかりの者と）してひそかに手に入れたい園の白菊（のような浮舟）であることよ。〈薫の心境〉

〈小野寺〉

【本文】
657　打つけに其人がたをかいまみのあなあやしとも思社なれ
四阿

【注】
○　打つけに……匂宮と浮舟との出会いが、突然の出来事であったことをいう。
宮（＝匂宮）はたたずみありき給ひて、にしのかたにれいならぬわらはのみえつるを、いま参の有るかなどおぼして、さしのぞき給ふ。（中略）（浮舟は）宮とはおもひもかけず、例こなたにきなれたる人にやあらんと思ひて、おきあがりたるやうだい、いとをかしうみゆるに、（匂宮の）例の御こころはすぐし給はで、きぬのすそをとらへ給ひて、こなたのさうじはひきたて給ひて、屏風のはざまにゐ給ひぬ。〈東屋〉

○　人がた……大君の形代としての浮舟を指す。『源氏物語』に九例見られる「人がた」の用例のうち、八例が宇治十帖のものである。そのうち、六例が大君の人形や薫が求めている大君の形代となる女性のことをいう。
むかしおぼゆる人がたをもつくり、〈寄生〉
うたてみたらし河ちかきここちする人がたこそ、おもひやりいとほしう侍れ。〈寄生〉

人がたのついでに、いとあやしく思ひよるまじき事をこそ思ひいで侍れ〈寄生〉
ひとがたのねがひばかりには、などてかは山里のほんぞんにもおもひ侍らざらん。〈寄生〉
かの人がたもとめ給ふ人にみせ奉らばやと、〈東屋〉
かの人がたのねがひものたまはで、〈東屋〉

残りの二例は、これらを踏まえて、大君の形代としての浮舟を指すものである。

かの人がたのたまひいでて、〈東屋〉
宮のうへののたまひはじめし、人がたとつけたりしさへゆゆしう、〈蜻蛉〉

○ かいまみ……匂宮が浮舟がいる場所をのぞいたことをいう。

なかのほどなるさうじの、ほそめにあきたるよりみ給へば、〈東屋〉
あきたるさうじを、今すこしおしあけて、屏風のつまよりのぞき給ふに、〈東屋〉

○ あやし……匂宮が浮舟に言い寄る行動は、「あやし」と表現されている。

これはいかなることにか侍らん。あやしきわざにも侍るかな〈東屋〉
ここにいとあやしきことの侍るに、〈東屋〉
いとあやしく侍りつることのなごりに、〈東屋〉

なお、匂宮の色好みの癖も、「さぶらふ人々もすこしわかやかによろしきは、みすて給ふなく、あやしき人の御くせなれば、」〈東屋〉と語られる。

また、浮舟の乳母が「かく（匂宮が）おはしましそめて、さらによきこと侍らじ。あなおそろしや。」〈東屋〉と予感しているように、この出会いは後の悲劇の発端となる。そうした運命の数奇さをいうか。

○ 思社なれ……「声清くとなふる御名を頼まれて身は罪なしと思ひこそなれ」〈藤簍冊子・四一三〉、「夜ひ夜ひに垣もる犬におどされてにくくも妹を思ひこそなれ」〈藤簍冊子・五八二〉。

【現代語訳】

突然に（匂宮が）その（薫にとっての大君の）形代（である浮舟）を垣間見し（匂宮が浮舟に執着を持っ）た、その垣間見を、ただならない（事態に展開していくきっかけとなる）ことだと思うことよ。

〔岩谷〕

【本文】

浮舟

658 河しまにいざよふ波のいかにしてふたゆく心せきやとゞめん

【注】

○ ふたゆく心……「浮舟が匂宮と薫の二人にひかれ、揺り動かされている気持をさす。」〈新大系〉。浮舟は、匂宮に惹かれつつも、

薫にうとましがられることも悲しいと思いながら、二人からの手紙を並べて眺める。

我心もきずありて、彼の人（＝薫）にうとまれたてまつらん、なほいみじかるべしと、思ひみだるるをりしも、かの殿（＝薫）より御使あり。（薫と匂宮との二人からの手紙を）これかれとみるもいとうたてあれば、なほことおほかりつる（＝匂宮からの手紙）をみつつふし給へれば、〈浮舟〉

○　せきやとゞめん……浮舟が、薫と匂宮と、どちらにも惹かれる気持ちをどうすることもできないでいることをいう。

ここちにはいづれとも思はず、ただ夢のやうにあきれて、（匂宮が）いみじくいられ給ふをば、などかくしもとばかり思へど、たのみきこえて年ごろになりぬる人（＝薫）を、今はともてはなれんと思はぬによりこそ、かくいみじとものも思ひみだるれ、〈浮舟〉

とてもかくても、ひとかたひとかたにつけて、いとうたてあることは出できなん、我身ひとつのなくなりなんのみこそめやすからめ、〈浮舟〉

【現代語訳】

川島に（さえぎられて）漂う波が二つにわかれて流れゆくような（、薫と匂宮との両者に惹かれる）心を、どうして堰き止める（ことができる）だろうか。（いや、できない。）〈浮舟の心境〉

〔小野寺・長嶋・横倉〕

【本文】

蜻蛉

659　それとだに思へどすべな宇治川の玉藻になびく妹がくろ髪

【注】

○　それとだに思へどすべな……薫が、川の水音を聞きながら、浮舟を早く引き取らなかったことを後悔しつつ、入水した浮舟の遺骸さえ探し出せないことを思い、やるせなく感じていることをいう。

（薫は）道すがら、とくむかへとり給はずなりにけることくやしう、水の音のきこゆるかぎりは、こころのみさわぎ給ひて、からをだにたづねずなりにけること、あさましくてもやみぬるかな、いかなるさまにて、いづれのそこのうつせにまじりけんなど、やるかたなくおぼす。〈蜻蛉〉

また、薫以外の人々も、せめて亡骸だけでもと、浮舟の死を嘆き悲しんでいる。

（乳母の言葉）むなしきからをだにみ奉らぬが、かひなくかなしくも有るかな。〈蜻蛉〉

（乳母の言葉）なき御からをもみ奉らん〈蜻蛉〉

（浮舟の母君）「おはしましにけんかたをたづねて、からをだにはかばかしくをさめん」とのたまへど、（右近ら）「さらになにのかひ侍らじ。行へもしらぬ大海の原にこそおはしましにけめ。」〈蜻蛉〉

○　玉藻……「長く美しい黒髪を「藻」にたとえて、みずみずしい乙女を指すことが多い。（中略）「藻」の特性である「なびく」や「寄る」などを掛けて、乙女との恋を詠むことも多い。」〈歌ことば〉。

【現代語訳】

せめてそれだけでも（探し出したい）と思うけれども、どうすることもできないことだ。宇治川の玉藻のように（美しく）なびく（ようにして流れていったのだろう）愛しい人（浮舟）の黒髪よ。

〈薫の心境〉

〔小野寺・長嶋・横倉〕

【本文】

手習

660　おのが上をよそに聞てはかつなげくたがゆるさねば死なぬ命ぞ

【注】

○　おのが上をよそに聞てはかつなげく……出家を遂げた後、浮舟は薫の様子を耳にする。薫はいまだ浮舟の死を嘆き、一周忌の法要を準備しているという。薫の愛情に胸を打たれ、また母君のことを思いもするが、素性を隠している浮舟は内心をひた隠しにする。

（浮舟は）きくに、いかでか哀ならざらん。人やあやしとみんとつつましうて、おくにむかひてゐ給へり。〈手習〉

（薫が浮舟のことを）わすれ給はぬこそはと哀に思ふにも、いとどはは君の御心の内おしはからるれど、なかなかいふかひなきさまをみえ聞えたてまつらんは、なほいとつつましくぞありける。（中略）あやしくめづらかなるこころすれど、かけてもいひ出でられず。〈手習〉

○　たがゆるさねば死なぬ命ぞ……死ぬことができなかった浮舟の、無念な気持ちを表す。

つひにかくていきかへりぬるかとおもふもくちをしければ、いみじうおぼえて、〈手習〉

【現代語訳】

（薫が自分の法要の準備をしているという）自分にかかわることを無関係な者として聞いては、一方で（心の内では薫や母君を思い）嘆く。誰が許さないことから、絶えない命（で、このような目にあう浮舟の運命）なのか。

〔大谷・沖崎〕

【本文】

夢浮橋

661　有てなき世の常をしもわたらへばなきがありてふいめのうき橋

【注】

○　有てなき世……浮舟が、自分が生きていることをひた隠しにしている状態をいう。

むげになき人と思ひはてにし人（＝浮舟）を、さはまことにあるにこそはと（薫は）おぼすほど、〈夢浮橋〉

〈浮舟は〉いまは世になき人とおもひはてにしを、いとたしかにこそものし給ふなれ。〈夢浮橋〉

いまは世にあるものとも（小君は）思はざらんに、〈夢浮橋〉

いまさらにかかる人（＝浮舟の家族）にもありとはしられでやみなんとなん（浮舟は）思ひ侍る。〈夢浮橋〉

○　いめ……「夢浮橋」巻に「夢」の用例は、五例ある。そのうち二例は、浮舟が姿を消して以来のできごとのことを薫がいったもの（「夢のやうなることども」〈夢浮橋〉、「あさましかりし世のゆめがたり」〈夢浮橋〉）で、さらにその薫の言葉を受けて浮舟が言った「いかなりける夢にかとのみ、心もえずなん。」〈夢浮橋〉という例がある。他は、浮舟が生きていたことを知った時の薫の心境（「夢の心ちしてあさましければ、」〈夢浮橋〉）と、弟の小君を見て、浮舟が弟や母と過ごした昔のことを思い出したときの心境（「思ひ出づるにも夢のやうなり。」〈夢浮橋〉）である。

○　いめのうき橋……「はかないこと、また、世の中がはかなくて渡りにくいことのたとえ。」〈日国〉。「無常な憂き世の比喩にも展開する」〈歌ことば〉。「春の夜のゆめのうき橋とだえして峰にわかるる横雲のそら」〈新古今・三八・藤原定家〉。

小君との再会にも無言で通した浮舟の態度は、「おぼつかなく侍る」〈夢浮橋〉、「おぼつかなき御有様」〈夢浮橋〉ときわめて曖昧なものとして語られ、結局は小君は「たどたどしくて、かへりきた」〈夢浮橋〉るしかなく、事の顛末が結局は曖昧であったことが、『源氏物語』の締めくくりとなっている。

【現代語訳】

（実際には）あって（も）ない（ように感じるおぼつかない）世の中を（、生きているのに死んでいるような状態で）渡（ってみ）ると、（その人生は、実際には）ないけれどもあるという夢の浮橋（のように、不確かなもの）であった（と気付いた）ことよ。

〔丹治・松山・村屋〕

〔付記〕

本稿は、平成二十一年度科学研究費補助金基盤研究（c）「近世冷泉派歌壇の伝存資料についての研究」（研究代表者　久保田啓一）による研究成果の一部である。

〈やまもと　すいこ・本学准教授〉